

2012年10月18日／浪宏友ビジネス縁起観塾

真の人間として生きる

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「法師品」

1. 法師

(1) 「法師」とは

「法師（ほっし）」とは人のために仏法を説く人です。出家、在家を問いません。

(2) 法師品の主題

- ① 人々が仏法を見失っている時代に仏法を説くときの心構え
- ② 仏法を正しく説く者には、どのような功德があるか

(3) すべてが菩薩

- ① 仏法を修行する修行者の中に次のような差別的な考えがありました。
 - ・ 声聞・縁覚は仏の悟りに達することはできない。
 - ・ 菩薩だけが仏の悟りに達することができる。
- ② 妙法蓮華経の方便品から授学無学人記品までの説法で、そのような区別はないこと、みんなが菩薩であり、仏となる道を歩んでいることが明らかになりました。

すなわち、あらゆる仏道修行者が、菩薩であることが明らかになりました。

2. 一念随喜

(1) 授記

釈迦牟尼世尊は、一念随喜の人々に授記します。

(2) 一念随喜とは

妙法蓮華の教えを聞いて、一念（指をパチンと弾く程度の時間）の感動を得ることを、「一念随喜」といいます。一瞬の感動です。

ただそれだけの感動を得た人でも、授記する（成仏の保証を授ける）というのです。

(3) 授記する理由

妙法蓮華の教えを聞いて素直に感動し、素直に信ずるような人は、無限に高められる要因をもつ人です。

このような要因を善根といい、真理に合った行ないを重ねることで養われます。

(4) 随喜を伸ばす

一念の随喜を一念で終わらせることなく、育てて大きくし、心に定着させることが大切です。一念随喜を育てるものは、供養と修行です。

3. 願生

(1) 願生 (がんしょう)

五種法師を行う人々は、願生の人々です。

大菩薩は、自分が生まれたいと願うところに、自由自在に生まれることができる。このような考えかたを、願生思想と言います。

(2) 業報 (ごっぼう)

六道を輪廻する人々は、業報の人々です。

善いことを行えば、人間界・天上界に生まれ、悪いことを行えば、地獄界・餓鬼界・畜生界・修羅界に生まれるという考えかたを、業報思想と言います。

生まれるところを自分で選ぶことができません。

(3) 願生と業報の違い

- ① 願生の方は、いかなる環境や状況に置かれても、真理のレールから外れることはありません。
- ② 業報の方は、環境が変われば環境に振り回され、状況が変われば状況に振り回されて、貪欲・瞋恚・愚痴の毎日を送ります。

4. 供養

(1) 供養とは

供養というのは、仏さまとその教えにたいする感謝のまごころをささげ、礼拝その他の行によってそのまごころをあらわすことです。

(2) 最大の供養

仏さまとその教えに対する最大の供養は、身を持って教えを実践することです。

5. 五種法師

(1) 五種法師

正行	受持	じゅじ	教えを受持していく決意を念々に新たにすること
助行	読	どく	教えをくりかえして学ぶこと
	誦	じゆ	学んだ教えを誦んじることができるほど心に植えつけること
	解説	げせつ	教えを人に解説してあげること
	書写	しょしゃ	教えが世に広まるように、あらゆる努力をすること

(2) 受持

① 「受」は、教えを深く信ずることで、つまり、帰依することです。

② 「持」は、その帰依の心を固くもちつづけることです。言い換えれば、身の振る舞い、言葉の振る舞い、心の振る舞いを教えに合わせ続けることです。

(3) 正行と助行

① 「受持」を、正行と言います。これが根本だからです。

教えに帰依し、身の振る舞い・言葉の振る舞い・心の振る舞いを教えに合わせるということは、自分の日常を教えに合わせ、教えのとおり生きていこうとすることです。

② 「読・誦・解説・書写」を助行と言います。正行を支える行だからです。

真理のとおり生きていこうとするならば、自ら真理を学び身につけなければなりません。

そのためには、自ら学ぶ「読・誦」と、人々に伝えることによってより深く学ぶ「解説・書写」が欠かせません。

6. 如来の使い

(1) 如来の使い

「人のために教えを説く」「人のために教えをひろめる」ことは、如来の使いとして、如来の行ないを行っているのだと経文に記されています。

(2) 真理を生きる者

自ら真理を研鑽しながら、他の人々と手を携えて、仏の境地に向かって修行を重ねるのが、真理を生きる者の本来の姿であると、語っているのだと思います。

7. 衣・座・室の三軌

(1) 教えを説く心構え

人々に教えを説くときは、如来の室に入り、如来の衣を着け、如来の座に着いて説きなさいと説かれています。これを「衣・座・室の三軌」と言います。

(2) 如来の室

① 「如来の室というのは、相手が善人であろうが、悪人であろうが、自分に突っかかってくるような人であろうが、すべて同じように救ってやるという大慈悲心、すなわちどんな人でも入れてやれる大きな部屋のような心という意味です」(庭野日敬著『法華経の新しい解釈』p.251)

② “同じような救い”とは、“その人の持っている本来の生命を生き生きと発現させ、すくすくと伸ばしてあげる”という救いです。

(3) 如来の衣

- ① 「如来の衣というのは、どんなひどい目にあっても、あるいはどんなにおだてられても、怒りもしなければ増上慢にもおちいらぬ、すなわち外からの悪影響をすこしも受けつけないような衣というわけで『法華経』の行者はいつもそんな固い心をもっていなさいという意味です」(同)
- ② 経文には“柔和忍辱”とあります。柔らか和やかでありながら、真理からは外れることのない固い心です。
- ③ “忍辱”は“辱めを忍ぶ”と書いてありますが、いわゆる我慢することではないことが分かります。大きな心で相手を包み込むので、怒りも生じませんし、増上慢にもならないのです。

(4) 如来の座

- ① 「如来の座というのは、一切を平等に見るということです。(中略)すべてのものの相違(差別)は相違として、あるがままに認めながら、その相違を超越した平等を見るのです。太郎は頭はわるいが手が器用だ。次郎は手が不器用だが頭がいい。その相違はちゃんと認めながら、しかし二人とも仏の目から見れば、まったく平等な人間であると見るのが『一切法空』です」(同)
- ② 経文に“一切法空”とあります。これは“一切法”は“空”であるということです。“一切法”とは、さまざまな相違がある具体的なものとです。“空”とは仏の目から見れば平等だということです。
- ③ 私たちは、相手が自分と違うことに苦しむことがあります。一切法は空であることがしつかりと分かると、お互いの違いを乗り越え、むしろ違いを生かそうとして、よりよい関係を結ぶことができるようになります。

8. 「空」について

(1) 諸法は空である

「諸法」すなわちすべての現象は「空」であって、仮のあらわれにすぎないという受け取りかたができます。

しかし、これだけでは、私たちがどう生きていいのかが分かりません。

(2) 固定したものはない

すべてのものごとは、原因と条件の和合によって存在しています。しかし、永遠不変で固定したものはなにもありません。これが「空」ということです。

ここから、原因と条件のありかたによって、ものごとのありかたが変わることがわかります。

ですから、よい現象を望むならば、自分自身がよい原因となり、またよい条件となればよいということが分かります。